



## 2020 年度パイロットリサーチプロジェクトの成果

秋田大学教育文化学部では、2000 年度から、秋田県内の自治体・教育委員会、民間企業、NPO 法人等との連携・協力による地域教育への貢献および研究成果の地域社会への還元を目指し、卒業論文等のテーマを自治体等から公募する事業を開始し、今年度で 11 年目を迎えました。「卒業論文テーマ等の公募」を、2019 年度からは「パイロットリサーチプロジェクトー学生による調査・実験テーマの公募ー」としました。調査・実験とは、今後の事業展開のための予備調査のように、将来を見据えたパイロット的な調査・実験を想定しています。自治体等から寄せられたテーマから研究内容として適切なものを採択し、教員に照会します。自らの研究成果を地域へ還元したい、地域をフィールドに研究したいと考える教員が授業（調査・実験・演習）や共同研究として、または学生が卒業研究（卒業論文）として取り組みたい場合に、そのマッチングを行います。逆に、学部教員が提案したテーマに賛同する、または関心がある自治体等からの申し出があれば、それも対象となります。2020 年度は新型コロナの影響もあり、卒業研究は 0 件、また、共同研究型 1 件は中止となり、授業型が以下の 2 件でした。

- ①学生による大仙市の魅力発見「発酵文化による大仙市の魅力の掘り起こし」  
提案者：大仙市企画部広報広聴課  
担当：益満 環准教授【プレゼミ】
- ②由利本荘市岩城地域における文化的体験機会の現状と創出について：  
提案者：由利本荘市教育委員会  
担当：篠原秀一教授【特定地域研究ゼミ】

### 大仙市の発酵文化発信プロジェクト

地域社会コース 3 年次 佐々木日向子

益満ゼミナールに所属する 3 年生 7 名が大仙市広報広聴課の職員の方々と共に、発酵文化を通して大仙市の魅力を発信するプロジェクトを行っています。秋田県内で大仙市が最多の酒蔵数を誇る個性豊かな酒造りについて、種麹メーカーや酒蔵を見学・取材し、大仙市市報への連載やインスタ

グラムなどで情報を発信しています。今回は、その活動について紹介したいと思います。

まず初めに、発酵についての知識を学ぶために、発酵食品に必要な微生物を製造している（株）秋田今野商店の生産・技術部長佐藤勉さんに Zoom でインタビュー調査を行いました。日本酒は麴によって発酵し、米のでんぷんを甘みに変えます。その麴を作るために必要な「種麹」を作っているのが秋田今野商店です。私が佐藤さんのお話の中で特に印象に残っているのは、菌と風土の関係です。日本の国菌に認定されている麴菌は、国外でも一定の条件を満たせば作ることができるそうです。しかし、原料が調達できない地域やその国の気候によっては難しく、その点で日本は麴菌を作る環境が自然に出来上がっていた土地だと言えるそうです。日本の風土が生み出した麴菌は、日本国内でも風土によって違いを生み出しながら、地域の食文化を築いてきたのだと思いました。

発酵の知識を学んだ後は、大仙市内の 5 つの酒蔵を見学・取材させていただきました。今回はその中から、（有）奥田酒造店を紹介します。奥田酒造店は、創業 300 年余りの歴史を誇る酒蔵で、協和地域の地酒として親しまれる「千代緑」を造っています。歴史のある酒蔵ですが、社長の奥田重徳さんが杜氏に就任してからは、衛生管理や温度管理のために新しい酒造りの方法を導入してきました。例えば、菌が繁殖しやすい麴室にオゾンクリーニングを導入したり、発酵を穏やかなものにするために仕込みの際の微妙な温度管理に電球を



（有）奥田酒造店での取材の様子

使用したりと様々な工夫を凝らし、さらなる品質の向上を実現してきました。このような酒造りに関わる技術や情報を専有することなく市内の他の酒蔵とも共有することで、大仙市の酒造りの底上げを図っているそうです。

取材を通して、蔵の香りや温度などを五感で感じながら日本酒や蔵人の方々の熱い想いを知ることができました。また、酒蔵同士での情報交換や種麹メーカーの存在、大仙市のサポートが、大仙市の日本酒、そして発酵文化を発展させているのだと感じました。地域全体で造り上げている大仙市の日本酒を、皆さんにも味わってほしいと思います。



インスタグラムへの投稿

## 「特定地域研究ゼミを終えて」

地域社会コース3年次 戸松知奈美

特定地域研究ゼミC講座の戸松知奈美です。私たちの講座では、由利本荘市岩城地域における文化的体験機会の現状を考察し、創出提案を行いました。

### ○活動の概要

この講座は、由利本荘市教育委員会岩城教育学習課から依頼された、秋田大学教育文化学部パイロットリサーチプロジェクトに対応したものです。由利本荘市岩城地域の生活環境と地域文化資源を多様な視点で詳細に地域調査し、その現状と可能性を考察しました。今回は地域住民の方々へのアンケートを中心に考察を進めました。

### ○野外観察からアンケート作成

岩城地域のことを語るには、岩城地域のことを知らなくてはなりません。まず手始めに岩城地域の野外観察を行いました。

ここで重要視したのは「よそ者」として地域資源や施設を見ることです。野外調査に限ったことではないですが、この「よそ者の視点で見ると」ということは、地域住民の方々が気付かないような、新たな発見を与えてくれる場合があります。「ここはこういうところだ」という先入観を捨て、情報を純粋に取り込むことが重要になります。

岩城地域を一通り歩いた後は、由利本荘市教育委員会岩城教育学習課の職員さんからお話を伺いま

した。現状で抱えている問題や教育、事業に関するお話などを伺うことが出来ました。

新型コロナウイルス感染症の関係で、今年度は調査の方法がかなり制限されていましたが、地域住民の方の声を直接聞くことが出来れば良かったのですが、今回はアンケートを中心に考察することになりました。アンケートは、伝統的な生活の知恵、失っては惜しい地域資源や個人的技能の継承についての質問をメインに作成し、自由記述式と選択肢式の両方を採用しました。表現方法にも気を使いましたが、質問の主旨とは異なる回答も複数見られたため、まだ改善の余地がありそうです。



道川海岸（2020年6月；著者撮影）

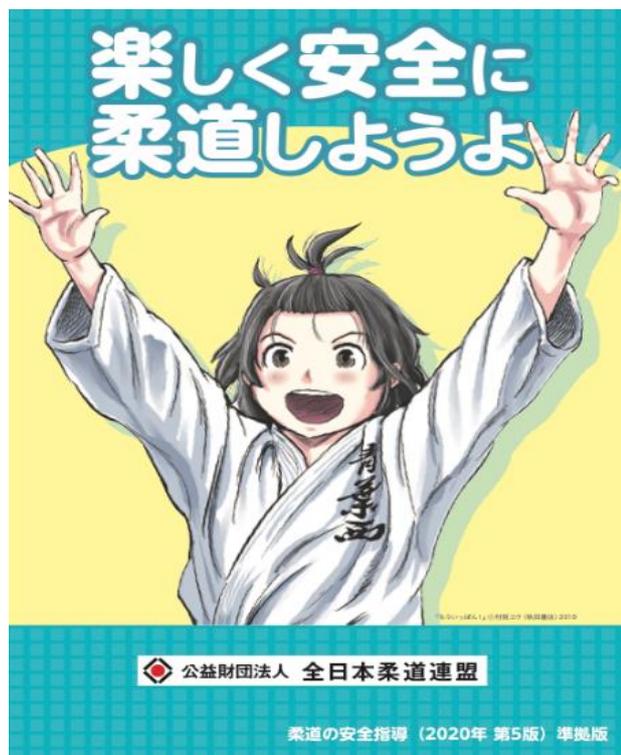
### ○アンケート集計から創出提案

アンケート結果からは岩城地域の文化的体験機会が不足していること、文化的体験を継承したい・されたいと思う住民の方が多くいらっしゃる事が分かりました。この「継承したいもの・こと」を継承させる機会を、「継承したいもの・こと」のマジョリティ・マイノリティに関わらず、全て平等に設ける必要があります。さすれば、地域の持続性を底支えしてくれる羽翼となりうるでしょう。

文化的体験機会の不足を解決するためには、家族の枠を越えた継承、つまり世代を問わない地域単位の交流が必要であると考えました。それらを踏まえて私たちが提案したのは、「地域カルタ」です。地域カルタとは、群馬県の上毛かるたのような地域の名所旧跡、偉人をカルタにしたものを指します。今回提案した地域カルタは、生活の知恵や文化などにもフォーカスを当てた、言わば地域密着型のカルタになります。日常生活というものは、大小問わず歴史や生活の知恵が積み重なって成立します。その日常生活は、各世代によって差異が生まれます。異なる世代の地域カルタで遊び、自分が知らなかった文化に触れることは、地域が協同する手蔓ともなるのではないのでしょうか。

特定地域研究ゼミを終えてみて、とても有意義な授業であったと感じました。自分に縁もゆかりもない地域について何かを深く考える、という行為は一筋縄ではいかないものであると再確認しました。いくら「よそ者の目線」といっても、無意識の思い込みは必ず存在し、それに気づくのは中々に時間を要しました。この授業で得たことを、他の機会でも活用できればと思います。

## 柔道の安全指導冊子のイラスト作成をして



この度、(公財)全日本柔道連盟発行の「楽しく安全に柔道しようよ」のイラストの作成をさせていただきました。私は、秋田大学柔道部に所属しており、顧問である三戸先生が、(公財)全日本柔道連盟総務副委員長ならびに重大事故総合対策委員を務められていることから、今回のような機会をいただきました。昨年、指導者用の「柔道の安全指導第5版」が発行され、好評を博してきましたが、子どもバージョンの作成が課題として残り、この度新たにこの冊子が発行されることになりました。

子どもに冊子を読んでもらい、きちんと内容を理解してもらうには、文字だけでなく、イメージしやすいイラストが重要になってきます。また、柔道の細かな動きや様子は、柔道を経験した人間にしかわからないものが多く存在します。一方で、それらを絵にして表す力も必要になります。そこで今回は、大学まで柔道をやってきた者かつ描画技術を持つ者ということで、冊子のイラスト作成に協力させていただきました。

重大事故につながる可能性がある具体的なイラストをふんだんに用いることによって、小・中学生に伝わりやすく、理解しやすいように事故防止をうったえかけることができたように思います。実は私自身、幼児の頃より柔道衣を着てきましたが、同時にこれまで多くの怪我を経験してきまし

教育実践コース(美術教育)4年次 馳尾幸太郎  
た。以前は、骨折、脱臼はもちろんのこと、膝の手術もしました。怪我で大会に出場できなかったり、思うような成果を上げられなかったりとたくさん悔しい思いもしてきました。大学入学後は、安全の重要性や事故防止のコツについて指導を受け、怪我をほとんどしなくなりました。

柔道をしてきて、一番悔しいのは勝負で敗北することではなく、怪我で柔道が思うようにできなくなるのだと私は思います。また、柔道で怪我をし、日常生活にも支障をきたすことは避けたいものです。未来の柔道界の希望である小・中学生の子ども達には一つでも怪我を少なく、安全に思い切り柔道を楽しんでもらいたいという願いがあります。

今回作成された冊子は、全国に配布され講習会や指導で活用されます。この冊子を通して、一人でも多くの子ども達が怪我をしてしまう場面を減らすことができたら嬉しいです。また、今回の取り組みで、4年間美術教育研究室で学んだ技術を生かし、幼い頃からお世話になってきた柔道の振興に貢献できたことを大変嬉しく思います。これからも美術と柔道を学び続けながら、教師を志す者として、それぞれの発展に貢献できるよう、より一層努力していきたいと思っています。



## 第6回模擬授業フェスティバルを開催

第6回模擬授業フェスティバルを2月15日(月)に3号館255教室で開催しました。今回は、新型コロナウイルス感染拡大対策として参加者を学内のみに限定し、また、途中で換気の時間をとるなど、感染症対策を講じて実施いたしました。

とはいえ、各発表は、工夫を凝らした充実した内容で、いずれも甲乙つけがたく、審査結果も僅差でした。第1位のグループは、こども lovers、第2位のグループは、ミライの先生(中辛)、第3位のグループは、数学科ソリタリーでした。第1位から第3位までのグループの方々に感想を書いてもらいました。

### 第6回 模擬授業フェスティバル プログラム

場所:3-255

1. 開会行事(13:00~13:10)
  - ①開会の辞
  - ②開会のあいさつ 鎌田 信 附属教職高度化センター長
2. 模擬授業演示(13:10~14:20)
 

	時間(15分)	グループ名
①	13:10~13:25	社会科教育2年次
②	13:25~13:40	ミライの先生(中辛)
	13:40~13:50	休憩(含換気)
③	13:50~14:05	数学科ソリタリー
④	14:05~14:20	こども lovers
3. 講評(14:25~14:40)
  - ①武田 篤 先生、②三浦 亨 先生、③廣嶋 徹 先生、④鎌田 信 先生
4. 表彰式(14:40~14:50)
5. 閉会の辞

### 模擬授業フェスティバルに参加した感想

#### 【第1位】こども lovers



#### こども発達コース3年次 美谷沙希

今回の模擬授業フェスティバル参加の目的は、小学校英語における教師としての教科指導力向上を図るためでした。昨年、大学内で行った模擬授業の反省点をもとに、子どもたちが主体的対話的で深い学びを実現することができるような授業改善を図りました。

前回の反省点として「教師主導の授業になっていて、子どもたちが活動する時間が少ない」という課題点がありました。

そこで今回は、オリンピックという身近な話題をもとに、子どもたちが楽しんで授業に参加することができるよう、授業を再編成しました。具体的には、教師が話し過ぎるのではなく、Simon says というゲームをオリジナルのものに作り替え、子どもに身体を使いながら学んでもらうことができるようなアクティビティを行いました。

授業提示後には、先生方から「“子ども主体”になっていた授業でよかった。」という好評をいただくことができ、私たちのねらいを、授業を介して伝えられたことにチーム全員が、喜びを感じました。

チーム一人一人が自分の役割に責任を持ち、全うしたからこそ得られた賞であったように思います。

本フェスティバルを開催してくれた皆様、及び共に奮闘し、授業を作り上げたチームのメンバー、そして私たちの授業を見てくださった全ての方々に感謝申し上げます。

今後とも教科指導力を図り、「子ども主体」の授業を行うことができる教師になれるよう邁進していきます。

#### 教育実践コース3年次 渡部ひかる

模擬授業フェスに参加してみて、大変勉強になりました。私は、チームワークの大切さと自信を持つことを学びました。

チームワークは、他のグループよりも大人数で準備したからこそ、みんなでいいものをつくろうと一致団結しました。そしてそれぞれの役割を最後までやり切ったからこそ、結果がついてきたと思います。教員になった際も、連携して行うことは何事も大事であると思うので、この経験を大切にしていきたいです。

また、自信を持つことは、学生や先生方の前で授業をするということを通して、前よりも自信を持てた気がしました。正直子どもの前で授業をするよりも大変緊張しました。しかし、1番大事なものは、“主体は子ども”と御講評いただき、子どもが

楽しんで学べる環境づくりには、教員の元気や自信のある姿が大切だと思うので、堂々とかつ包容力もある教員を目指していきたいです。

このような貴重な機会に参加させていただき、大変勉強になりました。ありがとうございました。これから更に頑張っていきます！

### 【第2位】ミライの先生（中辛）



教育実践コース3年次 日諸怜奈

「そもそも」  
「やる意味」  
「これ要る？」

模擬授業フェスティバルに向けて授業を作っていくうえで、一番話し合いの中で出てきた言葉がこの3つではないでしょうか。実は私たちは昨年も模擬フェスに参加しており、今回も昨年と同様「実習で見つけた課題の解決」「大学の講義で学んだ知識・理論の実践」を目的に参加しました。そのため2年目であること、また今回選んだ教科が私たちの専門教科である国語だったことから、昨年授業提示した道徳より授業づくりがスムーズにいきそうだね、なんて話をしていました。しかしいざ話し合ってみると、単元計画や教材を生かした授業の構想を考えること、授業のねらいや自分たちが提示したい授業の様子を伝えるための時間配分・発問の工夫などを考えるのが難しく、昨年以上に苦戦したのではないかと思います。

授業を作っていくなかで一番の壁だったのが「実用感」でした。「日記を、文学的作品で読み深めた表現を使いながら物語作文に書き換えること」という学習活動は、本当に必要なのか、やる意味はあるのか、子どもが学びの実感をもてるのか。そもそも「物語」をうまく書けるようになったとしていつ、どこで役に立つのか…。メンバーと授業について話し合っている様子は、議論というより口論に見えていたかもしれません。

1時間の授業、それを含んだ単元計画を作る以前の、国語科における「作文指導」についての認識を深めるところからはじまりました。

しかし、この私たちが直面した「壁」は模擬フェスで授業を作り上げる壁であると同時に、国語科教育が向き合うべき壁であるとも感じました。教科内容や評価規準が曖昧なのは作文指導のみならず国語科の学習内容全体にイえることであり、「国語を学校で勉強しても意味がない」といわれる原因の一つだと感じました。最近では国語科の教科内容を明確に示す動きが広まっていますが、そのすべてが教育現場や教員間で浸透しているわけではないことを、今回の模擬フェスで頂いた講評からも感じました。

以上の、今回授業づくりをした成果、そのうえで新たに見えてきた課題をふまえ、さらに子どもの学びや「楽しくわかる」授業実現のために研究と実践を積んでいきたいと思えます。

最後に、このような貴重な機会を設けてくださった皆様、素晴らしい授業を提示してくださった皆様ありがとうございました。

### 【第3位】数学科ソリタリー



理数教育コース4年次 三坂凌

今回の模擬授業フェスティバルは、自分の授業実践機会が確保できる場であると思って参加させていただきました。新しい生活様式の中、来年度より高校教員となる自分の経験のため、「遠隔授業」の形で授業づくりをしましたが準備の少なさからか、あまりいいものにはならなかったように思えます。高校での導入はまだ決まっておりませんが、GIGAスクール構想により全国の小中学生に一人一台タブレット端末を持つことになると思います。端末を持つということは、学校にいらなくてもどこからでも授業が受けられるということでもあります。また授業を映像化して再度見直すことも可能だと考えます。クラウド等で課題や資料を一括で管理することもできるので採点などの効率化ができると思っています。これをタブレット端末に限らず、個人の所有するスマートフォン等でもできると思っていますので、高校の内容で今回の授業を考えていきました。

今回私は、高等学校数学Ⅱにおける「微分・積分の考え」の導入授業を考えました。新学習指導要領では「探求」ということがポイントになっていることと、日常の事象を数学化することと数学の事象を日常化することも重要なことから、SNSのトレンドサーチ機能と自分の考えを関連付けた構成をMicrosoft Teamsというツールを使って遠隔で実践しました。実際にやってみた感想としては、やはり授業準備が足りなく内容精査ができていなかったのはそうですが、遠隔型の授業形態をとると生徒とのコミュニケーションが難しいということです。これは事前から課題にしていたことであるため、遠隔でも生徒と顔を見ながらやり取りできる体制を整えたかったところですが、まだうまくいかなかったように思いました。ですが、今回の模擬授業フェスティバルで実践できたことで、遠隔授業の難しさを実感できたことは良かったと思います。この学びを、今後の教員生活に生かしていければと思います。

最後に、このようなご時世でも本フェスティバルを開催してくれた運営の皆様、そして私の授業を見てくださり評価・指摘して下さった全ての方々へ感謝申し上げます。これを読んでいる皆さんが来年度のフェスティバルを盛り上げてくれること期待しています。

#### 【敢闘賞】社会科教育2年次



※写真撮影時のみマスクを外しています。



#### 教育実践コース2年次 松淵朗子

「何かしたい」

大学の授業以外で何かをしたい、何かに挑戦したいと考えていたところに、グループの仲間からの誘いもあり、参加を決めました。

模擬授業フェスティバルに参加するにあたって、勝つことにこだわるか、新しくチャレンジすることにこだわるか悩みました。最終的には「このような機会はあまりないだろう」「やりたいことをやろう」と思い、2022年度から導入される新科目「公共」に挑戦することにしました。公共は高等学校1、2年生の必修科目であることから、生徒に何を学ばせたいか、どんな姿で社会に出したいのかを考える必要がありました。また、そのために何を題材にするのか、そして、題材をどう生かすことができるのか、授業づくりの難しさを改めて実感しました。

内容について考えれば考えるほど、楽しさを感じながらも、自分の弱点や未熟さを痛感した2ヶ月間でした。どんなに面白い題材やネタでも、教材化できなければ意味がありません。教材化するには、深い知識と広い視野がなければ、題材と教科の内容を結びつけることもできません。この模擬授業フェスティバルに出場することを通して得た課題点や疑問点などを追求し続け、来年の実習に生かしていきたいです。

「公共」が始まる2022年、私たちは大学4年生です。残りの2年を有意義で、充実したものにするためには自分から動かなければいけないと感じています。「ボチボチ頑張ろう。でも、まだまだ」を合言葉に、脚を動かし、頭を動かし、心を燃やし続けたいと思います。

最後になりますが、模擬授業フェスティバルに出場できたことはひとえに多くの方々のお力添えのおかげです。運営、開催、評価して下さった先生方、院生のみなさん、本当にありがとうございました。そして、授業づくりにご協力いただいた、たくさんの方々に心より感謝申し上げます。

## 【表彰式】



## 新型コロナウイルス感染拡大防止の取り組み

### 【全国】

- 2/1: 全国の新規感染者数が 2000 人を切って、1791 人となる。
- 2/2: 東京都、埼玉県、神奈川県、千葉県、大阪府、京都府、兵庫県、愛知県、岐阜県、福岡県の緊急事態宣言を 3/7 まで延長することが決定。栃木県の緊急事態宣言は 2/7 で終了。
- 2/3: 全国の一日の死者数が 120 人となる。
- 2/15: 全国の新規感染者数が 1000 人を切って 965 人となる。
- 2/17: 日本でワクチン接種が開始。
- 2/23: 全国の重症者数が 500 人を切って、491 人となる。
- 2/13: 福島県沖で 23:08 頃に発生した地震で、宮城県と福島県で最大震度 6 強を記録。秋田市でも震度 4 を記録。東北新幹線、秋田新幹線は一部区間での運休が続いていたが、24 日に全線で運転を再開。

\* 一部不明・不正確な箇所があります

### 【秋田大学】

- 2/9: 卒業旅行等を理由とする県外移動は、緊急事態宣言の地域への移動は自粛、それ以外の地域への移動は感染防止対策を徹底、秋田に戻って 14 日間は自宅待機の上健康観察。3/22 に実施予定の卒業式は、開催規模・方法等を検討中。県外に移動した学生が式典に出席するためには帰県後 14 日間の自宅待機及び健康観察が必要。
- 2/18: 3/22 に卒業式を手形キャンパス大体育館及び本道キャンパス体育館で学部毎に分散して実施することを発表。卒業生・修了生のみ参加。
- 2/25・26: 東京会場も含め、前期日程を実施。

### 【学部・研究科】

- 2/15: 模擬授業フェスティバルを対面で実施。
- 2/17: 附属学校学部共同委員会を Zoom で実施。
- 2/19・20: あきたの教師力高度化フォーラムを対面と Zoom の併用で実施。

## 附属学校学部共同委員会総会及び研修会を開催

2月17日(水)15:00~16:45に標記の会を開催しました。共同委員会は学部と附属学校園の教員間の共通理解を深め、共同の取り組みを活発化するために設けているものです。教科・領域・校種別の部会があり、全員がいずれかの部会に所属することとなっています。そして、年に1回は全体研修会を開催するとともに、部会毎の協議を行う機会を附属小学校の鳩の子ホールで実施してきました。今年度は新型コロナの影響で初めてのZoom開催となりましたが、150名あまりが参加しました。附属小学校外池智校長の開会挨拶のあと、千葉圭子副校長による講師紹介に続いて、東京大学総合研究博物館遠藤秀紀教授から、「死体から命を読み取る解剖学者」と題して、おおよそ60分の講演が行われました。

遠藤先生が事前に書かれた概要は「何から何まで金と合理主義に牛耳られているいま、人を育てることに携わる皆さんとお話できる時間は何より有難い。感謝申し上げます。今日は反面教師遠藤から、動物の生きる工夫の話題を2、3お伝えしようと思う。パンダの指、アリクイの顎、ヒトの二足歩行などを登場させようか。それぞれの命がどう生きているかという進化の知の最前線を楽しんでもらえたら嬉しいが、実際のところ、死体の山に埋もれてのた打ち回る一学者の生き様を感じ取っていただけたら、最上の幸福である。遠藤が何ゆえにこんな偏屈な人間になってしまったのかが、今日の心根になるかもしれない。」というものでした。

遠藤先生は『人体 失敗の進化史』『パンダの死体はよみがえる』『見つけるぞ、動物の体の秘密：動物かいぼう学者が挑む進化のなぞ』『ニワトリ 愛を独り占めにした鳥』『東大夢教授』『解剖男』『遺体科学の挑戦』『哺乳類の進化』『爆笑問題のニッポンの教養 人間は失敗作である 比較解剖学』『ウシの動物学』など多数の著書があり、テレビ番組にも多数出演して、興味深

く、わかりやすく科学の成果と魅力を伝えている方です。

講演では、パンダの7本目の指のこと、アリクイの顎のことなど、解剖に関わる話では、ご自身の専門が、最先端の機械だけに頼るのではなく、目と指先の触覚など、五感で発見することに面白さがあることが強調されていました。死体はからだの歴史書であり、その歴史書を指先で読み解くわけです。

また、どのように研究者になり、今に至っているのかも触れられていました。先生は1965年東京生まれ東京育ちですが、世の中を憎んでいた10代、知の在り方に飢え渴いていた20代、指先で天下を取ろうとしていた30代、死体をかきあつめていた40代と整理して、特に10代の体験が研究にも大きな影響を与えているように感じました。

ケネディー大統領暗殺シーンなど、生と死との境目のこと、生き物がほんの少しの時間でモノに変わってしまうこと、生き物を殺して食べること、学校で宗教(天地創造等)と科学(進化論)について論争したことなども印象的でした。



さらに、展示場で、展示品に通常つけられているような名称等のパネルをつけなかった話では、「教科書的な教えを拒絶する」こと、本物に素のまま触れることの重要性が指摘されていました。型どおり、法律どおり、上から言われた通りにやっているのは研究も社会もなりたないこと、「人間はがんばらなければならない」のだということ、アカウンタビリティや市場原理といったことが研究をだめにしていくことなども、強く考えさせられた点です。

その後、各部会に分かれて、16:25~16:45に、今年度の活動実績と来年度の活動計画等について協議が行われました。

【文責：佐藤修司】



## 第11回あきたの教師力高度化フォーラムを開催

2月19日(金)と20日(土)に、標記のフォーラムを実施しました。第一日午前は秋田県総合教育センターとの連携に関するもので、60周年記念ホールで行われ、対面では総合教育センター難波所長、指導主事、教職大学院教員、院生など65名が参加しました。同時に、新型コロナの感染防止で収容定員が大幅に制限され、ホールに入れなかった教員5名程度、教職発展演習の受講学生37名程度がZoomにより参加しました。学部3年次対象の授業で、総合教育センター研修員が講師役として参加する教職発展演習に関わる学生からは、授業の成果としてまとめた、

- ①「場面かん黙児のいる通常学級における支援」  
3年次 小川華佳、熊谷風花、堤祐也、森井彩郷
  - ②「いじめのこれまでとこれから～LGBTに着目して」  
3年次 三浦優亮、佐々木琴音、佐藤栞夏、佐藤史苑、西牧柊太郎
- の二つの発表が行われ、総合教育センター研修員からは、この1年間センターで取り組んだ研究課題の成果として、
- ①「小学校道徳科における自己の生き方についての考えを深める指導の工夫ー『心のパスポート』」の作成と活用を通して」  
.....研修員 柿崎淳子
  - ②「知的障害特別支援学校小学部における生活に生きる知識・技能の習得と活用を目指した指導ー『算数科』と『日常生活の指導』の実践を通して」  
.....研修員 伊藤綾華
- の二つの発表が行われました。



1日目午後は、60周年記念ホールと3号館150教室、255教室に分かれて、教職大学院の院生による発表が行われました。

- カリキュラム・授業開発コース1年次
- 「理科における見方・考え方を視点にした授業改善方法について」.....佐藤大星

- 「科学的思考を高めるためのワークシート開発」.....高橋海渡
- 「小学校体育における跳び箱運動の下位教材の効果」.....三保 翔
- 「小学校体育における運動有能感を高める授業」.....新山壮一郎
- 「ICTを用いた中学校体育器械運動の授業における学習者の認知」.....大関隆貴
- 「小学校国語科における『説得型スピーチ』の指導方法の研究～ディベートによるスピーチの構造性と対話性の向上を目指して」・小野彰人
- 「中学校段階における批判的読みを中心とした指導方法に関する臨床的研究」.....清水里沙
- 「小学校低学年の音遊びにおけるオノマトペの効果の検討」.....伊藤真里奈
- 「小学校英語の『書くこと』における『英語嫌い』を作らない指導の在り方」.....相馬舜平
- 「図画工作科における子どもの新たな発想や構想を促す指導言の研究」.....工藤唯花
- 「小学校社会科におけるICT活用についての研究」.....庄司 航
- 「中学校社会科における、生徒の主体性を育成するための実践方策」・小熊大樹(現職教員)カリキュラム・授業開発コース2年次
- 「ICT機器を用いたプログラミング教育の円滑な導入のモデルづくり」.....本田和也
- 「平均学習において自ら『折り返し』を行う児童を育てる指導の研究」.....飯澤玲央
- 「社会参加意欲の醸成をめざすSDGsの授業開発ーフィリピンのバナナ農家が抱える貧困問題に着目して」.....沼田充貴
- 「小学校国語科において批判的読みの力を育むためのNIE教材の開発ー対話を核とした読み書き関連学習を通して」.....遠藤史都
- 「中学校数学における生徒自ら『一般化』する学習に関する研究」.....照井達也





2日目午前は前日午後と同様に三教室に分かれて、教職大学院で、今年度修了予定の院生の発表が行われました。

学校マネジメントコース1年次（すべて現職教員院生）

- 「教職員一人一人の学校参画意識を高めるマネジメントー学校の教育力の向上に向けた校内研修の在り方」・・・・・・・・伊藤充敏
- 「地域連携を核としたこれからの専門高校における学校経営ー地域産業連携協議会の構想と効果的な活用を目指して」・・・・・・・・藤原暁人
- 「高等学校における持続的な学校運営につながる組織マネジメント」・・・・・・・・川俣 玲
- 「知的障害特別支援学校における主体的な学びに関する検討ー自閉症のある児童生徒が自ら考え、行動する力を育む授業づくりの充実に向けて」・・・・・・・・小野直子
- 「特別支援学校における『同僚性』構築の課題解決に関する検討」・・・・・・・・小玉幸子
- 「地域と学校の協働による活動と育成を目指す資質・能力との関連」・・・・・・・・小坂美和
- 「学校組織マネジメントの考え方をういた教員のチーム力向上に関する一考察ーミドルリーダーの育成を視野に入れたカリキュラム・マネジメント研修のあり方」・・・・・・・・佐々木史子
- 「『グランドデザイン』作成による教師のカリキュラム・マネジメント意識の変容」鈴木達哉



**秋田大学教職大学院**

## 第11回あきたの教師力高度化フォーラム

本教職大学院では、年度末に実施するあきたの教師力高度化フォーラムにおいて、院生が研究した成果を発表する機会としてまいりました。今年度も、学校マネジメントの視点や主体的・対話的で深い学びの視座に基づく授業指導法の提案など、現代の教育課題に基づく様々な発表を行う予定です。また、2日目には、国立教育政策研究所生涯学習政策研究部の総括研究官である志々田まなみ氏をお招きし、「地域とともにある21世紀型学校の創造」と題したシンポジウムを開催します。今年度は、新型コロナウイルス感染症対策のため2日目の講演・シンポジウムのみZOOMによる公開となりますが、多くの皆様の参加をお願いいたします。

- ◆期日 令和3年2月19日(金)・20日(土)
- ◆会場 秋田大学教育文化学部3号館(60周年記念ホール、他)
- ◆対象 会場参加：秋田大学関係者及び招待者  
ZOOM参加：全国の教職員、研究者、教育委員会指導主事・研修員、教員志望学生等  
(ZOOM参加は2日目のシンポジウムのみとなります)

◆日程 (1日目：2月19日(金))

- 9:15 開場・受付
- 9:45 開会行事
- 10:00 秋田県総合教育センターとの連携による発表  
・教職発展演習発表(学部生)  
・センター研修員の研究発表
- 12:45 中間発表会(学部卒院生1年、現職教員院生)
- 15:15 研究成果発表会①(学部卒院生2年)

(2日目：2月20日(土))

- 9:30 開場・受付
- 10:00 研究成果発表会②(学校マネジメントコース現職教員院生)
- 13:00 講演「地域とともにある21世紀型学校の創造」  
(講師)国立教育政策研究所生涯学習政策研究部  
総括研究官 志々田 まなみ
- 14:25 シンポジウム「地域とともにある21世紀型学校の創造」  
(シンポジスト)  
栃木県立足利工業高等学校 教頭 井上 昌 幸  
能代市立二ツ井小学校 校長 佐藤 義 彦  
(コーディネーター)  
国立教育政策研究所 総括研究官 志々田 まなみ  
(コーディネーター)  
秋田大学教職大学院 教授 原 義 彦
- 15:40 閉会行事

※新型コロナウイルス感染症の状況により、計画を変更する可能性があります。変更がある場合は、下記の本学教職大学院HP(<https://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/>)に記載します。

【主催】秋田大学教職大学院  
【共催】秋田大学教育文化学部附属教職高度化センター  
【後援】秋田県教育委員会・秋田市教育委員会  
【問い合わせ先】秋田大学教育文化学部総務担当  
〒010-8502 秋田市手形学園町1-1  
☎018-889-2509 E-mail kyosou@jimu.akita-u.ac.jp



### 第11回 あきたの教師力高度化フォーラム タイムテーブル

**〈1日目：2月19日(金)〉**

60周年記念ホール (3号館145教室)	教育文化学部 3号館150教室	教育文化学部 3号館255教室
9:15～ 受付		
9:45～ 開会行事		
10:00～11:45 県総合教育センター研修 員との連携による発表		
11:45～12:45 昼食・休憩		
12:45～15:05 中間発表(学部卒院生、現職教員院生1年)		
15:15～16:10 研究成果発表会①(学部卒院生2年) ※修了認定会を兼ねる		

**〈2日目：2月20日(土)〉**

60周年記念ホール (3号館145教室)	教育文化学部 3号館150教室	教育文化学部 3号館255教室
9:30～ 受付		
10:00～11:40 研究成果発表会②(学校マネジメントコース) ※修了認定会を兼ねる		
11:40～13:00 昼食・休憩		
13:00～14:05 講演		
14:25～15:40 シンポジウム		
15:40～ 閉会行事		

**秋田大学教職大学院 第11回「あきたの教師力高度化フォーラム」参加申込方法**

今年度は新型コロナウイルス感染症対策のため、2日目午後の日程のみZOOMで参加が可能です。下記のURLにアクセスし、必要事項(氏名、E-mailアドレス等)を入力しお申し込みください。

- 申込URL <https://forms.gle/8hsbqb133zJZrtzu7>
- ※電話、FAXによる申し込みは受け付けておりません。
- ※申込書にご記入いただいた個人情報は、厳重に管理し、当フォーラムの事務手続き、今後のご案内を行う目的にのみ利用いたします。



- 申込締切 令和3年2月11日(木) 17時00分まで
- 2月17日(水)までに、ZOOMのID、パスワードをメールでお知らせします。
- 申込方法の問い合わせ先 秋田大学教育文化学部総務担当  
☎ 018-889-2509 E-mail kyosou@jimu.akita-u.ac.jp

2日目の午後は、60周年記念ホールにおいて、講演とシンポジウムが行われました。

13:00～14:05 講演 (Zoom)

「地域と共にある 21 世紀型学校の創造」

国立教育政策研究所総括研究官 志々田まなみ



14:25～15:40 シンポジウム

「地域と共にある 21 世紀型学校の創造」  
(シンポジスト)

足利工業高等学校長 井上 昌幸 (Zoom 参加)

二ツ井小学校長 佐藤 潔

(コメンテーター)

国立教育研究所 志々田まなみ

(コーディネーター兼パネリスト)

秋田大学 原 義彦

### 志々田まなみ氏の講演について

カリキュラム・授業開発コース 1 年次 小野彰斗

「施策や背景」、「現状」、「協働を目指して」という 3 つの観点でお話しがあった。Society5.0 (AI やデジタル技術が駆使された、情報化社会からさらに高度化された社会) を目指すにあたり 2030 年の社会を見据えた学びの形を実現できるような社会全体が変わっていく必要がある。このような背景から、学校運営協議会と地域学校協働本部が車の両輪となり、地域との協働に基づいて運営される学校という具体像が提示された。

私はこの講演を聴き、2 つの点が印象に残った。1 つは学びを変えたいという話についてだ。黒板とチョークを使って、ひとりの教師が 30 人に教えるという形以外のもっと多様な学びの形がある中で、今の教育の仕組み以上に個別最適化した学びを子どもたちができるような仕組みを考え、それを実行できるように取り組んでいかなければいけないと強く感じた。そのためには、教師が学びの新たな形を模索し続けるとともに、子どもにとってよりよい学びの形になるように声を上げ続けなければならないのだと思う。

もう一つは、協働とは何かという話についてだ。協働とはお互いにメリットがある形でお互いが不足する部分を補い合う状態のことである。本来教育というものは、社会と密接に結びつき協働するものであると私は考える。しかし、現在の教育は社会との結びつきがあまり感じられない状態にあると思う。社会と学校がともに協働する様な状態になる必要があると感じた。教育現場に出た際に私ができることは、子どもの学習を授業内、学校内で終わらせない授業を行っていくことだと思う。授業での学びが授業の中、学校の中だけに留まることなく、子どもがたくさんの場面でその

学びを活用する事が出来るように授業や教育のあり方を考え続けたい。そして、そのような授業や教育に少しでも近づけるように、取り組んでいきたいと思う。

### シンポジウムについて

カリキュラム・授業開発コース 1 年次 庄司 航

能代市の二ツ井小学校校長の佐藤潔氏と栃木県足利市の足利工業高校教頭の井上昌幸氏の事例紹介から地域と連携する学校の在り方について協議した。学校と地域を結ぶ地域連携教員の活用や実態について進んだ取り組みをしている栃木県からの事例紹介では小中高に地域連携教員が派遣され、子ども達の学びに対して貢献していることが分かり、二ツ井小学校からの紹介では地元のことについて学ぶ郷土教育やプール、音楽などの様々な専門的なスキルが必要な取り組みについて地域人材の活用を試みている姿が見られた。

今回のシンポジウムを通して、学校を地域の核ととらえられることが重要であると思った。近年は、子ども達が地域で育てられているという感覚が薄くなってきていると感じる。自分が育った地域を見てみても、自分の世代は同じ地域の人で地元の学校に通い卒業していたのに対し、今はその地域一帯では学校に通っている子どもがいないという状態で学校の行事や活動から地域全体が遠ざかっていることが見受けられる。そのような状況が各学区で増えていくと徐々に子どもと地域とのつながりなども薄くなってきてしまうとを感じる。その中で、今回の 2 校が示してくれたような地域の人材を取り上げることや、地域のことについて知るような学習を学校が中心となって取り組んでいくことが地域で子ども達を育てることにつながり、それがまた地域で活躍してくれる人材の育成などにもつながってくるのではないかと考える。そのためにも、今回のシンポジウムで学校と地域を結ぶ地域連携教員の存在を知り、どのような取り組みを行っているのかを知れたので、未来の学校像を考えながら学びを深めていきたいと思う。



## 2021年3月末で退職される先生方からのメッセージ

佐々木和貴先生、森和彦先生、高樋さち子先生、廣嶋徹先生、奥瑞生先生、三浦亨先生の6名の方がこの3月末で退職されます。長い間、学部・研究科に貢献していただいたことに感謝いたします。

### 退職に際して

#### 英語教育コース 佐々木和貴

昭和61年4月、郷里の秋田大学教育学部に採用となり、以来35年の長きにわたって、この学部勤務することになりました。英語科から欧米文化選修、そして英語・理数教育講座と所属は変わりましたが、かわいい学生たち、良き同僚、親切な事務の皆さんに囲まれて、幸せな時間を過ごすことができたことを、ありがたく思っております。

その間、さまざまなことがありましたが、特に記憶に残っているのは、50代後半に附属中学校の校長を3年間務めさせていただいたことです。それまで大学の中だけで暮らしていた私のようなものにとっては、見るのも聞くのもはじめてのことばかりで、慣れるのに苦労しましたが、今となっては得難い経験だったと思っています。どのような話だと中学生の心に届く挨拶になるか考えることで、文章力も鍛えられました。

また60代では、思いがけず副学部長に選ばれ、4年間学部の運営に携わったことも、大事件でした。もともと、こうした分野は不得手なため、みなさんにご迷惑をおかけしましたが、また別の世界を見せてもらえたように思います。慣れない書類書きに悪戦苦闘したことで、また別の文章力が鍛えられました。

今後の予定については、諸般の事情で、特別教授としてあと1年残り、教育研究指導業務のみを担当することになりました。大学で見かけたら、お声をかけてください。また今年度、基盤研究(B)に採択されましたので、課題の「シェイクスピア崇拝と18世紀イングランド娯楽ビジネス」についてのプロジェクトが、さらに3年間続きます。ですから、60代後半は、これまでよりも自由になる時間を使って、シェイクスピアとしっかり付き合う生活をしたいと考えております。今は、35年間（前任校の高知大学人文学部を含めると39年6ヶ月）大過なく勤め上げることができ、安堵しております。長い間、本当にお世話になりました。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
定年退職にあたって

～嵐とともに秋田での四半世紀～：嵐（激しく乱すもの。また、事態や社会を揺るがす重大事）

#### 心理実践コース 森 和彦

秋田大学に着任する年（26年前）の初めでした。岐阜の金華山山頂に登って初日の出を祝うイベン

トに家族全員で参加し、麓で振舞われた甘酒を飲みながら「秋田でスキーができるぞ」と子どもたちに告げました。そして「秋田でのスキーの練習」と称して家族で岐阜最後のスキー旅行から帰った翌日の夜明け前に、あの阪神淡路大震災はやってきました。その後、我が家の面々は地下鉄サリン事件で怯える東京をすり抜けて（地下鉄には乗らずに）、こまちが開通する前の雪の秋田に入ったのです。私の家族にとっても変化の連続で大変だったと思います。みんなよく頑張りました。風の又三郎のように嵐とともにかっこよく？来秋したわけではありませんが、心身ともに混乱する嵐の中をくぐり抜けて秋田に着任したのです。

さてその後、附属小学校の授業を見る前に子どもたちが通う市立小学校の授業参観をさせていただいて受けた最初の印象は「旧態然とした授業風景」で、がっかりしたものです。というのも子どもたちが通っていた岐阜の長良西小は研究指定校？で県内の有望な若手教員が集められて先進的な取り組みを採用していたからでしょう。この捉え方はその後、附属小の授業はもとより、市内の小中学校の授業を指導主事訪問のスタッフとして参加させていただくことによって、時間とともに私の中で劇的に変わっていきます。

またこの間、教育学部から教育文化学部への準備とカリキュラム編成作業（まさに嵐の中の作業でした）に、湊先生の指揮下で微力ながら関わらせていただいたと記憶しております。その時、今まで私が享受してきた自在な（言い方を変えれば教授の裁量に依存した）大学授業からの隔たりに違和感を覚えました。この二つの経験は、「ただの教員養成所の教官」ではなく「教育行為に関わる基礎心理学者」としてのミッションも自覚する道程へと繋がりました。

そして秋田に来てから十六年後、附属特別支援学校の校長に推挙され、入学式に何を話そうかと思案している最中に「3・11」の猛烈な嵐の洗礼を受けました。その時までは自分にとって特別支援教育は縁がない話と思い込んでいました。ところが校長になって自分の記憶が再整理・構造化されてきたのです。自分の母親もかつてこのような教育に携わっており、さらに小学生のころ、その母から言われて近所の『アッコちゃん』に「嵐のごとく遊ばされていた事」を！！そして「全国の附属学校の授業参観研修」や「竿灯当事者としての参加」をはじめとする様々な初体験も、「嵐と共生す



題はテスト勉強のことへ。「ねえ、テスト勉強してる?」、「うん、一応ね」、するとある友だちが、「テストからそれるけどお、勉強ってえ、何のためにするんだあ?」と言い出しました。私はそんなことをあまり考えたことがなかったので、「別に深く考えなくてもいいじゃんねえ」と答えました。他の子たちは、「大人になってから、いいらしをするためだと思うよ」とか「やっぱり、勉強してえ、いい会社とか入ってたくさんお金もらってさあ」とか。「でもおお金なんてえ、まじめに働きさえすれば、何の仕事でももらえるよ。なのに、なんで勉強すんのお」。これには誰も答られません。私は、家に帰って一人で考えてみましたが、難しくて答えは出せそうにありません。そして、そのことはいつの間にか忘れてしまいました。でもあるときふと思い出しました、「勉強なんですか」と。気になって図書館で本を調べたり、兄に質問したり、友達と話したりしました。そして、次のように考えてみました。

私は生まれてから、何人もの人によって育てられ、助けられて生きてきた。だとしたら、いつかその人たちのためになる働きをしなければいけないと思う。また生まれてくる人たちのために、自分が育てられ助けられてきたのと同じようにしてあげなければいけないと思う。でも今、私にはどんな力があり、どのように役に立てられるのだろうか。だから、今の勉強を続ける中で、そういうことを考えていかなければいけない。そう考えると、勉強とは、私にとってとても幅広いものに思えてきました。中間テストのような教科だけが勉強の内容ではないと思えてきました。家族やクラスの仲間と過ごす生活、自分一人でいろいろ考えを巡らす生活、これらすべてが私にとっての勉強材料だと思えてきました。社会のために役立つなどと考えると、あまりに大きすぎて実現不可能のように思えてくるのですが、やがて大人になったとき、自分の持っている能力の中で最も優れた力を、私を取り巻く人たちのために発揮できる人間にはなりたいたいなあと思います。でも、そのことだけが勉強の目的だとは思えない時もあります。だから私

はこれからも、なぜ勉強するのかを知るために、勉強していかなければいけないなあと思っています。

この作文を書いた生徒は、以前私が勤務していた中学校で、一人一人の生徒の成長を願い、情熱をもち、学習指導はもちろん、生徒指導、学級経営などで素晴らしい力を発揮してくれた先生で、今もバリバリ働いています。

近い将来、教壇に立つ皆さん、その時児童生徒に同じことを聞かれたら・・・ぜひ一緒に考えられる先生になってくださいね。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
離任に当たって

教職実践専攻 三浦 亨

教職大学院の実務家教員として3年前に赴任したのがつい先日のことのように思われます。気が付いたら、あっという間に3年が経っていました。

教職大学院で大学院生に関わる分量と同じくらいの時間を、教職課程科目を受講している学部生の方たちと過ごしました。学生の皆さんが学年を上がるとともに、「先生になるぞ」という思いを強くし、教採対策を我が事として捉え、成長していく様子を見るのが嬉しく、その場に立ち会えたことが何よりの喜びでした。

ここに赴任した私の役割は、「理論と実践の往還」が求められる中で、本学における教員養成の枠組みに学校現場の感覚や学校文化の良い点を取り入れること、それを学生・院生たちに伝えることだったと思います。その役割を果たせるよう自分なりに努めてきたつもりですが、振り返っても漠として自分の残したものは頼りなく、恥ずかしい限りです。でも、秋田の教育界の次代を担う方たちと関わることで、一人でも彼ら・彼女らを支える役目を果たすことができたとしたら幸いです。

いつかまた機会がありましたら、その役割に加えていただきたいと思います。3年間本当にお世話になりました。ありがとうございました。

発行 秋田大学教育文化学部／教育学研究科

〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1 TEL 018-889-2509 FAX 018-833-3049

教育文化学部・教育学研究科HP <http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/>

学部研究科通信「みなおと」バックナンバー⇒[http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu\\_magazin.html](http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_magazin.html)

教職大学院通信「暁鐘の音(かねのね)」⇒[http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/graduate/graduate\\_magazin.html](http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/graduate/graduate_magazin.html)

\* 誌名「みなおと」の由来である秋田県女子師範学校校歌(1910年制作)を聴くことができます。

[http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu\\_symbol.html](http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_symbol.html) をご覧下さい。